第７章　家族

７．１　意識の変遷

家族志向の強まり、あるいは家族回帰というような現象についての指摘はこれまでも多く行われてきたように考えられる。さて、こういった現象は世論調査に表れているであろうか。まずは、生活全体の中での家族というものの位置付けを見てみよう。

(1)　一番大切なもの

国民性調査で、「１番大切なもの」に関する設問が、1963年より行われている。

> ○あなたにとって１番大切と思うものはなんですか。１つだけあげてください（なんでもかまいません）？（自由回答法）

自由回答をまとめたものを見ると、着実に1973年以降、「家族」という回答が増加している（図７－１）。この増え方を年齢別、生年別に見ると、40歳前後の年齢で非常に増加しており、かつ最近の生年の世代が、家庭をもつ中堅層となるにしたがって強めていることがわかる（図７－２，７－３）。

(2)　一番大切なもの

同じような設問が、朝日新聞社世論調査にある。

> ○あなたにとって一番大切なものは何でしょうか。
> ・家族　・健康　・仕事　（他にも「友人」「お金・財産」「趣味・教養」「宗教」「名誉・地位」の選択肢があるが、ここでは省略）

1978年から87年にかけて、「家族」が「健康」に代わって最も多くなっている。特に40代男性では、「仕事」が21％から９％へと大きく減少している（図７－４）。

図７－１　一番大切なもの

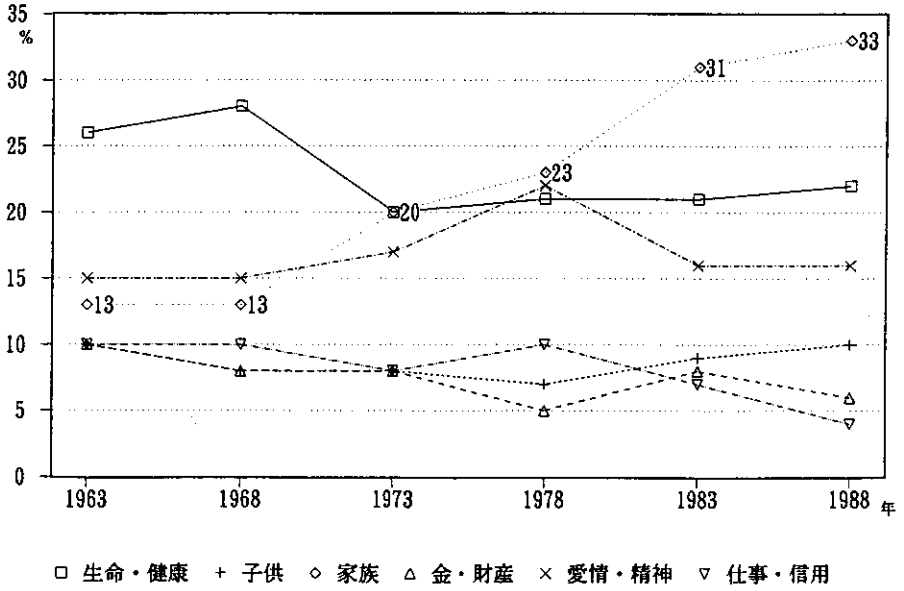


図７－２　一番大切なものは「家族」（年齢別）

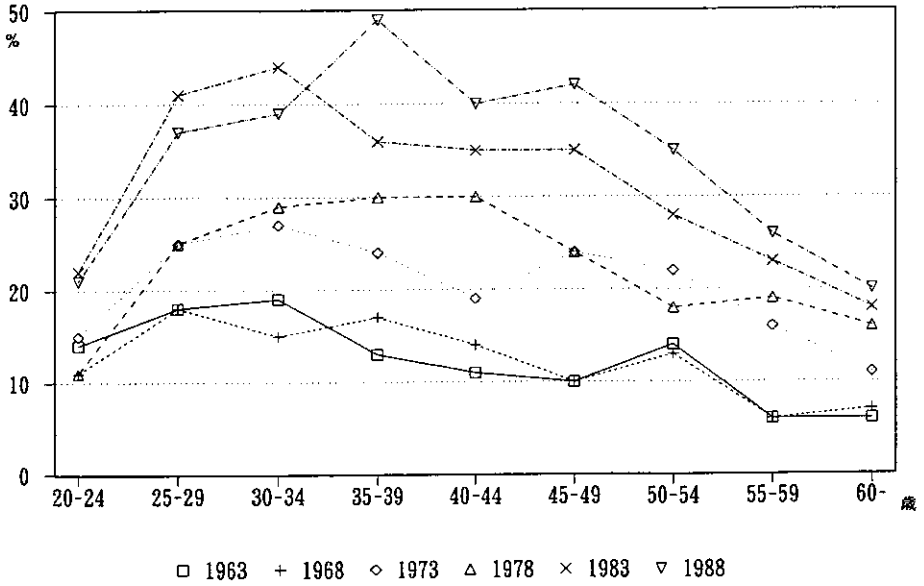


図７－３　一番大切なものは「家族」（生年別）

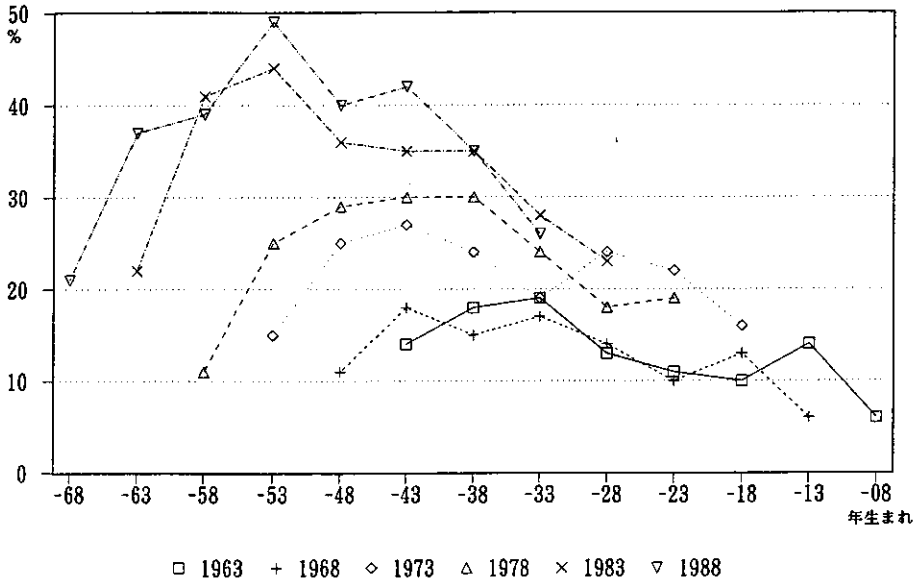
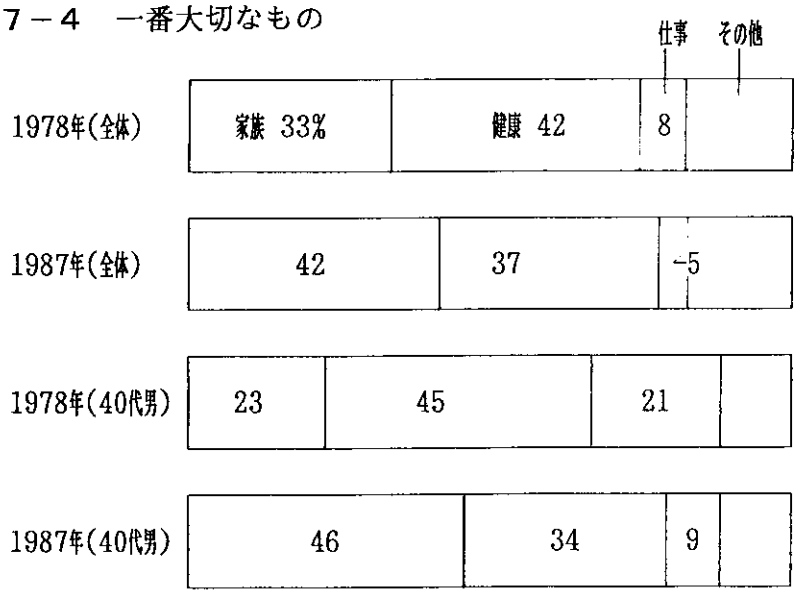


図７－４　一番大切なもの



このように、「家族」の生活に占める地位は高まってきているが、次に、他国との比較を行っている世界青年意識調査の設問を見てみよう。

(3) 生きがいを感じるとき

○あなたは、どんなときに生きがいを感じますか。（複数回答）
・社会のために役立つことをしているとき　・仕事に打ち込んでいるとき
・勉強に打ち込んでいるとき　・スポーツや趣味に打ち込んでいるとき
・家族といるとき　・友人や仲間といるとき
・他人にわずらわされず、一人でいるとき（回答が少ないため、図では「無回答」と共に省略している）

これは複数回答のため、他国との比較をするのは難しいものの、「家族といるとき」に生きがいを感じる割合は、低くなっている（図７－５）。

(4) 家庭生活に満足か

同じく世界青年意識調査に、次のような設問がある。

○あなたは、家庭生活に満足していますか、それとも不満ですか。
・満足　・やや満足　・やや不満　・不満

日本では不満度が増加しており、他国に比べても不満度は高くなっている（図７－６）。

(5) 理想の家庭

次に、家族の内容について表しているものとして、日本人の意識調査に、理想の家庭についての設問がある。

○リストには、異なった四軒の家庭の様子が書いてあります。あなたはどの家庭がもっとも好ましいとお考えですか。
・父親は一家の主人としての威厳をもち、母親は父親をもりたてて、心から尽くしている　（夫唱婦随）
・父親も母親も、自分の仕事や趣味をもっていて、それぞれ熱心にうちこんでいる　（夫婦自立）
・父親は仕事に力を注ぎ、母親は任された家庭をしっかりと守っている　（役割分担）
・父親はなにかと家庭のことにも気をつかい、母親も暖かい家庭づくりに専念してる　（家庭内協力）

これを見ると、「家庭内協力」が増加し、「役割分担」は減少している。「夫婦自立」、「夫唱婦随」は、ほとんど変化していない（図７－７）。これは、前章の男女平等意識の増加と整合した結果となっている。

図７－５　生きがいを感じるとき

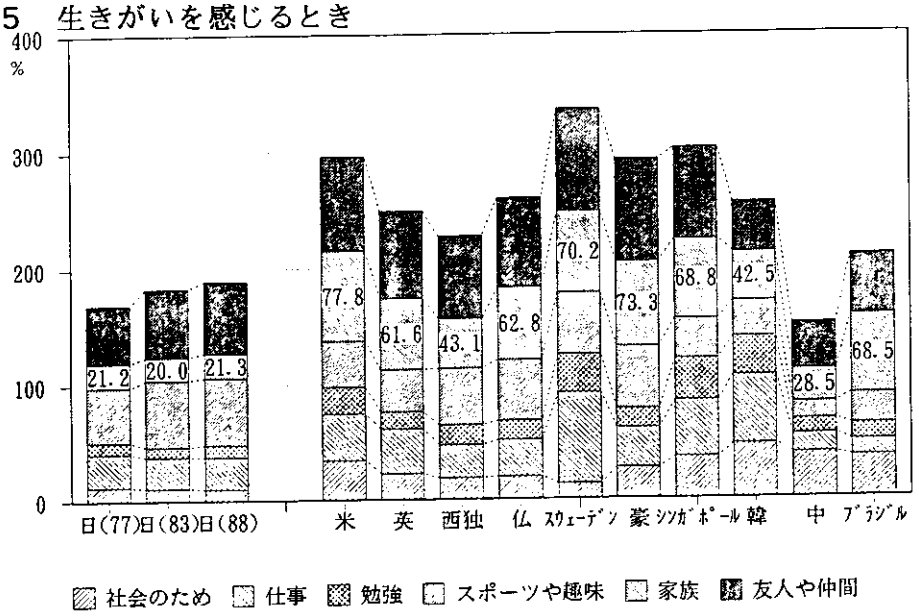


図７－６　家庭生活に満足か

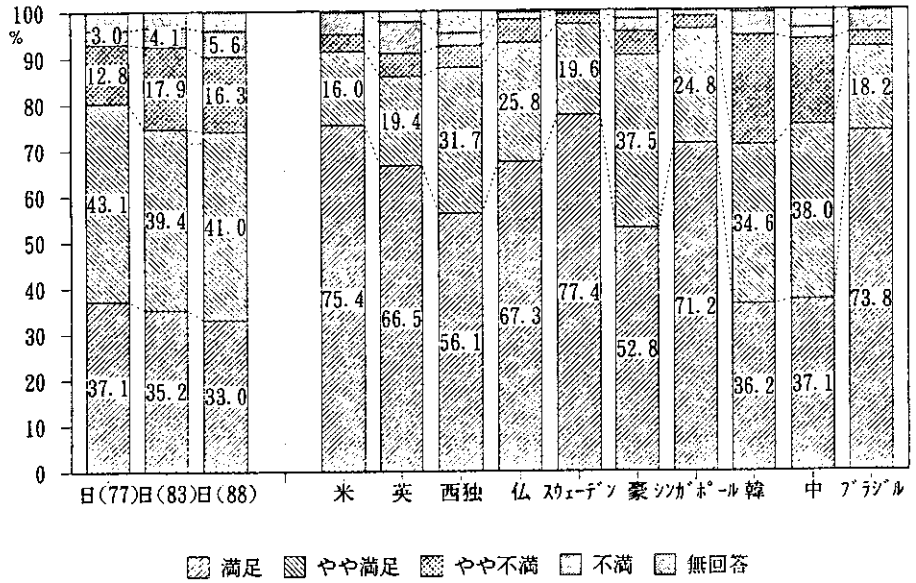
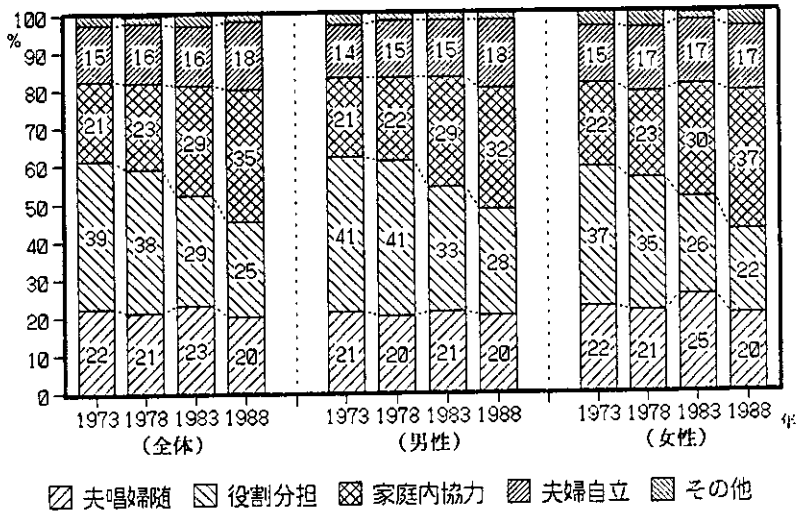


図７－７　理想の家庭



(6) 父子の関係

日本人の意識調査で、親子（父子）の関係についての設問がある。

○ことし学校を卒業して社会に出た男の子がいるとします。父親はその子に対して、どういう態度をとるのがいちばんいいとお考えですか。 ・みずから模範を示し、見習わせる　（模範） ・より多く人生の経験を積んだ者として、忠告や助言を与える　（忠告） ・一人の同じ人間として、親しい仲間のようにつき合う　（仲間） ・子供を信頼して、干渉しない　（不干渉）

全体として大きな変化はないが、「不干渉」がやや増加している（図７－８）。

(7) 望ましい親

世界青年意識調査でも、親子についての設問がある。

○あなたは、どんなタイプの父親（母親）が望ましいと思いますか。 ・子供に対して厳しい父（母）　・子供と親しい友人のような父（母）

ここでも変化は小さいものの、「友人のような」が増加してきている。ただし、全体に占める割合は、他と比べると小さい（図７－９，７－１０）。

７．２　変化の要因と今後の方向

以上の内容から、家族について大切にするという考えは、かなり前からの潮流で、次第に広まってきていることは明らかである。他と比較した上での優先順位は、特に中堅世代で非常に上がってきている。

家族を大切にする考え方は、日本ばかりか万国共通のものである。単に「家族」という対象を他との比較でとらえる場合、この家族志向は今後も変わることはないであろう。かつての日本で「家族」より「仕事」という回答が部分的な世代で多かったのも、仕事が特殊な地位を占めていたためである。今後、社会の安定や時短などの条件面が満たされることによって、家族の重視度はなお一層強まるであろう。

だが、青年について国際的に比較してみた場合、日本は不満度が増加しており、しかも家族に生きがいをもつ割合は低い。家族の成り立ち方やイメージは各国で異なっており、安易な比較は難しいが、日本の家族状況は、意識上においてはあまり良いものでないことは確かであろう。

こうした状況は、次章で触れるように、既に消滅した伝統的な家意識になりかわる、各人に共通した家族のイメージというものがはっきりせず、そのために世代によって家族の認識に差があり、それが青年層の不満度が国際的に高いなどというように表れていると考えられる。

家族の内容に関する設問での回答の変化をこうした背景を踏まえて検討すると、前章の男女平等意識の強まりによる家庭内協力の増加や、さらに個人志向化による親子の人間関係の部分化というものが多少であるが見られている。したがって、今後は、個人主義の強

図7－8　父子の関係

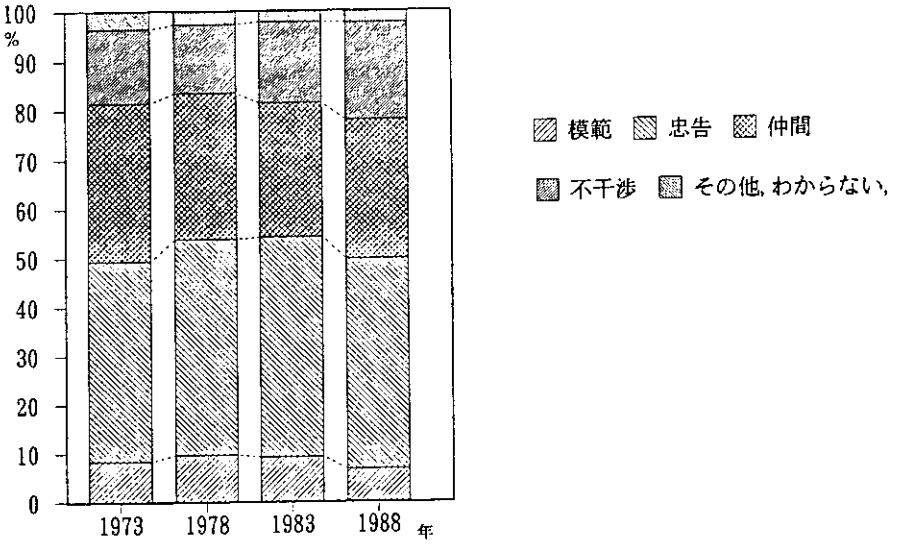


図7－9　望ましい親（父）

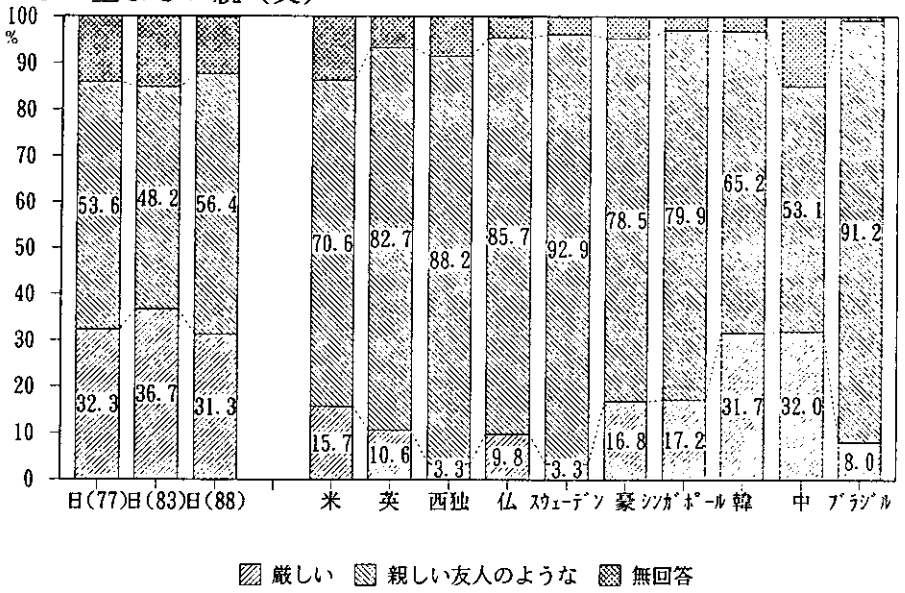
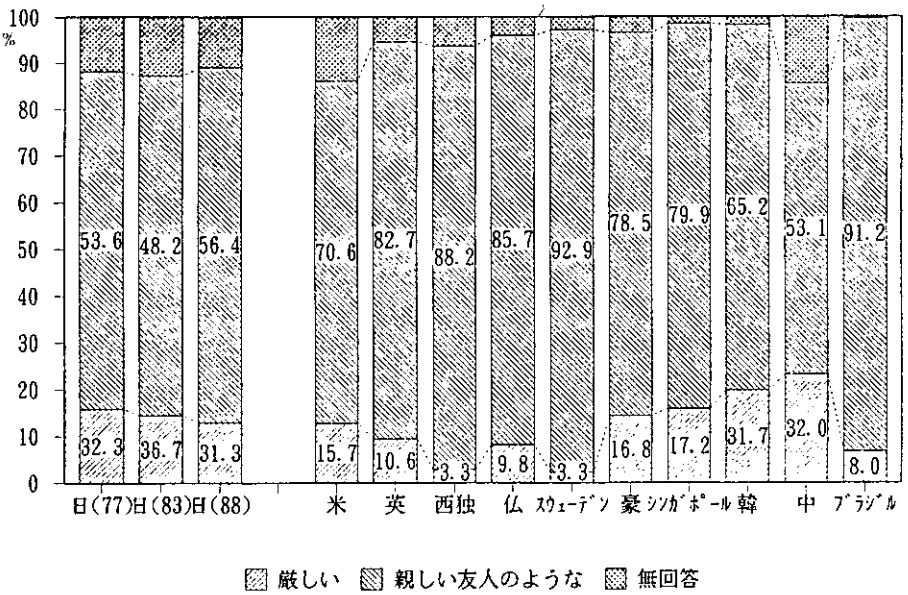


図7－10　望ましい親（母）



まりを前提として、個人主義の上での家族へとその内容が変わっていく可能性を示唆できる。将来は、家族を大切にするという傾向は変化しないが、その内容は、個人重視の潮流の影響を受け、個人化を前提としたものとなるだろう。